

# 幼稚園で過ごした一年

坂本 衣里

私は、昨年の四月から一年間、お茶の水女子大学附属幼稚園において、非常勤講師として働かせていただいていた。この一年という短い期間で、私とその役割を十分に果たせたとはいえないが、個人としては、様々な経験をさせていただき、とても有意義な時間を過ごすことができたと思っている。

最後にこのような形で、この一年を振り返る機会を与えていただいたことにも深く感謝する。

## 新入園児とともに過ごす一学期

一学期、特に前半は、一対一のかかわりが非常に多かったように思う。たとえば、多くの子どもたちが囲まれていたとしても、それは子ども同士がつながりをもった集団ではなく、それぞれが大人（私）とのかかわりを求めている。

この時期、新入園児は急激な環境の変化に戸惑って

いたし、進級した年中児のなかにも、慣れた幼稚園とはいえ、部屋も変わり、新入園児も加わって新しい雰囲気になったクラスのなかで落ち着かない子がいた。目にいっぱい涙を溜めて過ごす子、何をしたいかわからず、不安げにさまようような子どもの姿が園内のあちらこちらに見られた。そんな時期、忙しい担任にかわる抛り所として私を頼ってくる子どもがいるのは当然のことであった。

年少児のA夫との最初のかかわりについては覚えていない。ただ、私の名前を一番始めにはつきりと呼んだ子であることは確かである。私は、名前が年少の担任と同じことから、自分のことは名字で言うようにしていたのだが（A夫の担任もそう呼んでいた）、彼は、母親に聞いたらしく、入園して一週間もたたないころから、「えりせんせい、えりせんせい。」とさかんに呼びかけるようになり、一緒にいることが多くなった。

B子は、新入園の年中児である。言葉はあまり発しなかったが、いつも園庭への出入り口に立ち、じっと

私を見ているようなところがあつた。近づくと、始めは、担任とは違うらしい私に対して様子をうかがうように一言二言ポツポツしゃべる程度だったが、しばらくすると、時々私について歩くようになった。

C夫は年長児ではあつたが、年少の途中から年中の一月まで海外で生活、二月から再び通い始めたばかりということ、新入園児のような不安定さがみられた。このころは虫さがしに夢中で、よく一緒に行こうと誘われた。

ブロックでカメラを作つて写真をとったり、砂場の道具をもつて小屋のなかに入り、食べ物を作つたりして楽しみたいA夫、何をするでもなく大人に寄り添っていたい、会話を楽しんでいたB子、一緒に虫（あり）さがしをしてほしいC夫など、そのほかにもさまざまに声をかけてくる子どもたちがいた。自分が必要とされていることは素直にうれしかったし、もちろん、楽しくもあつた。しかし、一人一人にはできるだけ丁寧にかかわっていたし、急に無理をして子どもと

子どもをつなげようとするものではないこともわかってきたつもりではあったが、目を重ねるにつれて、こうした個々への対応が続くなかからは、なかなか保育をしているという実感がもてないことに気づくようになった。かといって、フリーとしてもっと動くべき場所があるのではないかと全体に広く動こうとすると、かえって遊びの表面にふれるだけのようになると、かえってしまうこともあり、それもまた保育の実感へはつながらず、結局、時折、私から離れて友だちとの関係を作り始める子どもたちにはっとしたりしながらも、かわらない個別的なかわりの多さのなかで、どこかでこれでいいのかという思いをもち続けていたように思う。

しかし、一年たってみると、このとき私のまわりにいた子どもたちは、大きく変わっていた。正直言って、今回自分の記録を見直すまで、一学期の彼らは私の記憶から姿を消していた。いろいろな面で不安げな姿を目にしていたC夫もすっかり友だちのなかにと

け込み、いい顔をして卒園していった。B子は、クラスの子や全園児が集まるような場面では、時折落ち着かない様子をみせたりするものの、普段の遊びのなかでは、友だちと楽しそうに笑い合う姿を何度も目にするようになった。私の姿をみると必ず名前を呼ぶのだが、傍らには友だちがいることも多く、必ずしも私を必要としているという意味の呼びかけではなくなっていた。A夫は、その性格のかたくなさゆえに、友達と衝突することもしばしばだが、遊びへの意欲は常に溢れているし、多少強引ではあるが、友だちをグイグイとひっぱって活動を展開している。

もちろん、ここまでの変化には、担任の先生の日々のかかわり、子どもたち自身の力によるところが大きいのだが、子どもたちのあの不安定な時期の支えに私も少しでもなれたとしたら、あの戸惑いつつもゆつくり彼らと関わっていた時間も保育としての意味を十分にもっていたと言えるのだろう。

## 遊びに入り込む二学期

個別的なかわりが多くなりがちだった一学期、特に前半とは対照的に、一学期の終わりから二学期の前半は、年長、年中の遊びにかかわっていくことが多くなる。きっかけは全く別の意図によるものであったが、一時的とはいえ、遊戯室という一つの場にある程度の時間、継続して居続けるようになったことで、私の動き方は大きく変わったと思う。

一つの場所にいることで、その場の連続した流れが見えるのと同時に、他の場の様子を気にしすぎず、一つ一つの遊びにゆっくりかかわることができた。それによって、そこにかかわる子どもたちを少しずつでも理解するヒントが得られたし、そこでどのような援助をしたらよいかを考えやすくなった。

年長、年中児がほとんどということもあって、遊びも大きく展開し、また友だち同士のぶつかりあいも多

く見られた。

いろいろな形で動いたり、声をかけたりしても、必ずしも場は盛り上がらなかったり、子ども同士のぶつかりあいに対する接し方にも悩まされ、落ち込むことも多かったが、子どもにとっても、一緒に生活する保育者にとっても、すぐうまくいくことだけがいいわけではなく、その過程が大事なのだということがわかってくると、気持ちは楽になった。

## 年少児と過ごす三学期

教育実習、入園検定による休園期間の後から三学期は、ほとんどの時間を年少児と過ごすことになる。



一学期からかわりの多かつた年少児ではあつたが、担当として位置づけられることによつて、さらに子どもたちとの関係も深まり、担任ともより話がしやすくなつた。

この時期、子どもたちの動きは、年少児においてもほんとに大きく広がりを見せるようになり、それぞれが別々の活動をして楽しんでいた砂場にも協同した動きが見られるようになる。

二月のある日、D夫が砂場に一人で向かう。二学期にもよく砂場で遊んでいたD夫であつたが、ちよつと久しぶりに一緒に砂場に入つてみようと思う。「砂をやわらかくする」という活動から手伝つて、やわらかくした砂で山を作ることになる。途中で入つてきたE夫とF夫のうち、F夫のほうはD夫の山を手伝い、「宝物をかくそう」と提案して一緒に砂場の道具を埋めたりするなど、さらに盛り上がっていくかと期待し

たが、E夫のほうがいまひとつのらず、結局F夫を連れ出して行つてしまう。また二人になつて続けていると、今度はG夫も手伝いに入ってくるが、ちよつどタイミングが悪く、お弁当の時間がせまつていたこともあり、明日続きをやるということ、へとつておいてくださいの札をさして、終了する。しかし、午後には、その横に、隣のクラスのH夫、I夫などが対抗するように同じような山を作つていたり、J夫、K子を交えて、再びD夫が山作りに没頭していた。

翌日も山作りは続いていた。年少にしてはかなり大きいので、ほかの子どもたちも気になるようで、私は直接は関わらなかつたが、砂場には人が絶えなかつた。いつまで続くか楽しみになる。

その翌日は、年少の担任の一人が出張のため、一日クラス担任を引き受ける日であつたが、この日、砂場では大きなさらに大きな動きが見られることになる。

その日もまた、D夫は朝から砂場に向かつた。する

と、山に盛る砂を掘っているうちにある発見をする。

砂場の縁の内側に一段の段差をみつけたのである。それから、L夫、M夫とともに、始めはかすかに見えていただけのコンクリートを完全に露にする大仕事が始まった。残念ながら、私はその日、担任として他の子の対応に追われることが多く、十分にその活動を見守り続けることはできなかったが、それは、山作り以上に隣のクラスの子どもたちにも影響を与え、隣のクラスでいまひとつ遊びに集中できない様子が見えれば見られていたN夫も、D夫と翌日も続けるといふ約束をかく結ぶほど積極的に参加し、D夫との新しい関係を作り始めるきっかけともなった。

この大仕事は、その後数日続いて収束していったが、時折、段差が少し埋められては掘りかえされるといふ繰り返しが続いた。

この活動は、私が見た年少児の活動のなかでは、最も大きい部類に入らと思う。自分とD夫の一つの小

な活動が、クラスを越えて大きな流れとなつて展開していく姿に感動を覚えた。自分が保育者として、子どもものなかに入っている実感がそこにはあった。

卒園式の日、子どもたちの涙でくしゃくしゃになった顔を見て、子どもたちがどんなにかすばらしい時間を過ごしてきたかをあらためて知る。そして、その時間を支える仕事のすばらしさを知る。年少児だった彼らも、やがてそんな顔をして巣立っていくことである。私自身は、どれほどの力にもなっていないことを知りながらも、同じ時期の一部でも共有できたことをほんとうに幸せに思う。

このような幸せな時間をくれた子どもたち、先生方にこころからお礼を言いたい。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)